

令和7年度 算数科実践・研究計画

部 員 ○伊藤智美、猿田千穂子、佐藤咲紀

1 昨年度の成果と課題

昨年度の実践を通して、意欲をもって学習を進めたり、主体的に自分の問題解決方法を表現したりする姿が見えてきた。

- ① 4年「角の大きさ」では、身の回りにおけるいろいろな角度を探る中で、他の人が気付いていないものを見付けようと、角度探索に没頭していた。自分で見付けた角度を分度器を用いて実際に測定していく中で、自分が測定した角度の外側も角度と言ってよいのか友達に相談したり、測定するにはどうしたらよいのか実際に手を動かしたりしながら、生活経験から見いだした問いを算数に結び付けようと奮闘していた。しかし、子どもの学びが教師を介して子どもに戻る場面が多くなり、再び個の学びを深めていく姿を十分に見ることができなかった。集団で学んだ事を受けて個の学びを見つめ直すための手立ての必要性を感じた。
- ② 6年「比例と反比例」では、日常の中にある比例の場面を見付けたり、既習の学習を発展させるにはどうしたらよいかを考えたりした。興味・関心に沿って比例する2つの数量の関係について考えた。子どもたちは、身近な問題場面である水のかさ、画用紙、面積、速さ、長さなどについて場面を選択し、個々の学習計画に沿って問題を解きながら、既習事項に戻って考えたり、個やペア、グループで問題解決をしていったりする姿が見られた。
- ③ 2年「1を分けて～分けた大きさの表し方は?～」では、子どもたちが日常的に「半分」や「 $1/2$ 」という言葉を用いたり、折り紙を半分に折ったり、食べ物を人数分に分けたりする経験を、算数の学習と結び付けて考えた。1枚のチョコレートを1人分が同じになるように分け方を考える問題場面を作成し、九九を使って答えが12になる式を作ったり、チョコレートの紙を切って分けたりして、既習事項の活用や身近な具体物を操作する活動を通して課題解決をする姿が見られた。さらに、課題解決方法への理解を深めるために、自分の作成した問題を解決することが難しい子どもに対して、他の問題場面を通してそれを理解し、自分の課題解決につなげていく手立てがあるとよいと感じた。

こうした成果と課題を踏まえ、算数科部は、自律した学習者の姿を次のように捉える。また、自律した学習者が育つ授業デザインの具体的な取組を次のように設定する。

2 算数科における自律した学習者の姿

- ① 生活の中から生まれた問いや、既習事項を発展させた問いから、自分で課題を見だし、算数に結び付けて考える姿
- ② 自分で設定した課題に対して、自分に合った学習形態や解決方法を自ら選択しながら学びを進める姿
- ③ 問題を解く過程や結果を表現し伝え合う数学的活動を通して、個と集団での学びをつなぎ、個の学びを深めていく姿



3 授業デザインの具体的な取組

- 個々の学びと協働的な学びに往還が生まれるような他者の学びを共有する場面を設ける。
- 課題解決の幅が広がるよう授業を展開し、子どもたちに学びを委ねる時間を確保する。
- 獲得した新しい知識や方法などを次の学習や生活の中で活用できるよう、見通しをもったり、学びを共有したりする場を導入に設ける。